

中島 伽耶子展 「Hedgehogs (ハリネズミたち)」

中島 伽耶子は、壁や境界線をモチーフとして人と人との距離や関係性を問う作品を制作している。これまで地域の芸術祭で空き家などを使い自然光を活かした展示を多く手掛けてきた中島にとって、地下のホワイトキューブでの展示は今回が初めてとなる。資生堂ギャラリーの、地上から降りていく階段の途中にある踊り場から2つの展示室を見下ろすことができる独特な構造を活かし、空間全体を使ったインスタレーションを作り上げた。

中島はまず、展示室の間に巨大な壁を設置し、空間を2つに分断した。 踊り場には玄関チャイムのような呼び鈴が設置され、鑑賞者がそれを 押すと階下にある非常ベルがけたたましく鳴り響く。踊り場から見え るのは、白く塗られた大きな壁と明るい無機質な部屋。壁には透明ア クリルの破片が無数に突き出て、中央に設置された扉の横の玄関ライトが時折点灯する。壁の向こう側に人が通るとセンサーが感知し灯りが点く仕組みになっている。扉は、鍵がかけられ開くことはないが、 往来できるわずかな可能性を示唆している。もう一方の部屋の照明は 暗く、植物や昆虫といった有機的な模様の壁紙で寝室のように装飾された壁をアクリルが貫通し、破片が床にも散らばる様子は「攻撃」や「破壊」を想起させる。しかし、明るい部屋からの光を透過するアクリルは天から降り注ぐ光線のようで、「希望」を見出すこともできる。そ こには「暴力」と「美」の間の揺らぎが表現されていた。

中島は、壁紙、呼び鈴、扉や玄関ライトのような生活のアイテムを使用することで、展覧会の体験を鑑賞者自身の記憶と結びつけてもらいたいと考えた。音と光の多様な使い方は、学生時代に研究した田中敦子の作品から学んだ。鑑賞に「能動性と意外性」を組み込み、音と光によるサインは、ちょっとした行為がもたらす意図しない結果や他者に与える影響をあらわす。「時代とともに価値観が開かれることで、私たちは多様な考え方を知り、理解し合えるチャンスを得るとともにより無自覚に他者を傷つける場面が増えた」と中島は述べている。展覧会のタイトル「Hedgehogs(ハリネズミたち)」は、ショーペンハウワーの「ハリネズミのジレンマ」から着想を得た。寄り添いたいが近づくとお互いを傷つけてしまうという心理的な葛藤を描いた寓話だが、その動物は本来はヤマアラシだったという。このタイトルには、ハリネ

ズミと針のような毛を持つという外見が似ているだけで同じカテゴ リーにされてしまったという、短絡的な分類化の危うさも含んでいる。

壁は分断するものではあるが防護となることもあり、また、壁を介して「反対側」にも「隣」にもなりうる。合理化のための切り離しや格差が拡大する世の中に存在する、階層、ジェンダー、世代、民族などの壁、そして、パンデミックによる見えない壁が人々を孤立させる一方で、オンラインでのコミュニケーションは広がり、SNS上でのパーソナルスペースへの侵入や言葉による暴力が問題となっている。中島の興味は、「自分と他者とを隔てる壁を破壊しようとするのではなく、想像力を使いながらの壁越しの対話」にあるという。これまで以上に他者との距離の保ち方が難しくなっている現代社会において、壁はどこにあり、どのような関係性を可能にするのか、この展示を通して改めて考えさせられた。鑑賞者を引き込む魅力的なプラン、そしてそれを実現させる強い意志と力を持つ中島の今後の活動に注目していきたい。

中島 伽耶子(なかしま かやこ)

1990 京都府生まれ

2020 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士後期課程修了

主な個展

2021 「Talk to the wall 中島伽耶子展」galerie 16、京都

主な展覧会

2021 「奥能登国際芸術祭 2020+」飯塚の旧事務所、石川

2019 「FREMANTLE BIENNALE 2019」Old Customs House、オーストラリア

2019 「気配と存在」A-Lab、兵庫

2019 「Fault line art festival」、台湾

受賞歴

2017 Tokyo Arts and Space 平成 29 年度二国間交流事業プログラム(派遣)

2016 「ゲンビどこでも企画公募」沢山遼賞

Kayako Nakashima Hedgehogs

Kayako Nakashima makes works that interrogate the distances and relationships between people, taking as her motifs walls, borders and other barriers. *Hedgehogs* was the first exhibition in an underground white cube for an artist who to date has put together numerous exhibits at regional art festivals, using sites such as vacant houses and natural light. Utilizing the unique structure of the Shiseido Gallery, which gives a view over two rooms from the landing midway down from street level, Nakashima created an installation that occupied this entire space.

She began by installing a gigantic wall between these two galleries. partitioning the space. On the landing, she installed a bell resembling a door chime, which when pressed by the spectator caused an alarm bell downstairs to sound noisily. Visible from the landing were a large white-painted wall, and a bright, sterile-looking room. Protruding from the wall were dozens of clear acrylic shards, while next to a door cut in the middle of the wall, an entrance lamp lit up from time to time. The light came on when a sensor detected a person passing on the other side of the wall. In this work the door is locked and never opens, but suggests a slim possibility of being able to go through. The other room was dimly lit, with the shards of acrylic piercing the wall on this side, which was decorated in the manner of a bedroom, with wallpaper of an organic design with plants and insect life, the sight of acrylic fragments scattered on the floor as well prompting visions of attack or destruction. Yet the acrylic with light passing through from the brightly-lit room resembles here light pouring down from the ceiling, and therein we may also identify "hope." Thus the artist offered an oscillation between violence, and beauty.

By employing everyday items such as wallpaper, a doorbell, door and entrance lamp, Nakashima wanted spectators to connect their experience of the exhibition to their own personal memories. She learned of the numerous applications of light and sound through her university research on the works of Atsuko Tanaka. Working activity and the element of surprise into viewing of the installation, Nakashima's signals in light and sound demonstrate how the smallest of actions can bring unintended results, and impact on others. Nakashima has said "It strikes me that as society has become more open to different values over time, along with becoming familiar with more diverse ways of thinking, and gaining an opportunity to understand each other better, there are now more situations in which we can unconsciously cause hurt to others." The title of the exhibition, *Hedgehogs*, is inspired by Schopenhauer's "hedgehog's dilemma," a parable describing the psychological conflict of desiring intimacy, but fearing the parties will hurt each other if they become close. The creature of the story was originally a porcupine, apparently, and the title also refers to the dangers of overly simplistic classification, the hedgehog ending up in the same category solely by virtue of its spiny appearance.

A wall may serve to divide, but perhaps also to defend, and the place through the wall may be at once "the other side" and "next door." While the barriers of class, gender, generation and ethnicity in a world of growing disconnection and disparity due to economic rationalization, plus the invisible barriers erected by the pandemic, cause people to become isolated, online communication continues to grow, spawning problems with the intrusion of social media into personal space, and verbal aggression. Nakashima says that her own interest lies not in trying to break down the walls that divide us, but channeling the power of imagination to engage in dialog over those walls. In today's world, where maintaining distance from other humans is harder than ever, Nakashima prompted us through her installation to reconsider where the walls might be, and the kinds of relationship they make possible. With her intriguing plans to draw in the viewer, and powerful determination and ability to make those plans reality, Kayako Nakashima is definitely an artist to watch.

Kayako Nakashima

1990 Born in Kyoto Prefecture

2020 PhD, Intermedia Art, Tokyo University of the Arts

Selected solo exhibition

2021 Talk to the wall, Kayako Nakashima galerie 16, Kyoto

Selected group exhibitions

2021 SUZU 2020+ OKU-NOTO TRIENNALE Former the office in lizuka, Ishikawa

2019 FREMANTLE BIENNALE 2019 Old Customs House, Australia

2019 Kehai to Sonzai A-Lab, Hyogo

2019 Fault line art festival, Taiwan

Awards

2017 Tokyo Arts and Space, Exchange Residency Program(Japan-based creators sent abroad)
2016 Ryo Sawayama Award, Open call for art project ideas 2016

第15回 shiseido art egg賞 受賞

中島 伽耶子

異なるジャンルのクリエーションに関わる様々な分野で活躍する3人が審査し、3つの展覧会の中で、 資生堂ギャラリーの空間に果敢に挑み、新しい価値の創造を最も感じさせた展覧会に shiseido art egg 賞を贈ります。

総評

本年の審査員は金沢 健一、小林 エリカ、小田原 のどかの 3 氏が務めました。審査員は shiseido art egg 展の開催期間中に各展示を鑑賞し、作家からの解説を経て審査にのぞみました。

演劇とインタビューを交差させた映像を通して、苦しみや生の意味、信仰と救いなどを追求した石原 海、作者自身の頭部を型取りして作った人形と自身を一緒に撮影した連作を中心に、映像、インスタレーションも交えて鑑賞者の視覚認識を揺さぶった菅 実花、ギャラリー内にアクリル片を突き刺した巨大な壁を設置し、暴力性と美しさを同居させ、コミュニケーションの問題を提示した中島 伽耶子。メディアや表現方法は異なりますが、不確実・不安定な時代の中で、社会全体の問題にアートがどう関われるかを真摯に問い、それらを洗練されたかたちで表現するという共通した姿勢が見られました。

審査は「展示の完成度の高さ」「資生堂ギャラリーの空間で何をどのように表現しようとしているか」という主要な基準に則り、熱い議論が続きました。

最終的には、資生堂ギャラリーでなければ実現できない空間の使い方の独創性と、物質感を伴う作品によって身体性の伴う展示を実現したことが評価され、第15回 shiseido art egg 賞は中島 伽耶子氏に決定しました。

貴重なお時間を shiseido art egg 賞審査に費やし、時代に即した新しい視点を加えて議論を重ねてくださった金沢 健一氏、小林 エリカ氏、小田原のどか氏に心から御礼申し上げます。

金沢 健一(彫刻家)

東京都生まれ。工業製品としての金属を素材に、幾何学的な形態による構成的な作品、またそれと並行して、不定形に熔断した鉄板から音を発見する《音のかけら》、振動の物理現象であるクラドニ図形を利用した《振動態》など視覚、聴覚、触覚を結びつける作品を制作する。資生堂ギャラリーでは、2001年から全5回のシリーズ企画展「life/art 今村源、金沢健一、須田悦弘、田中信行、中村政人」に参加。



小林 エリカ(作家 / マンガ家)

東京都生まれ。目に見えないもの、歴史、家族や記憶、場所の痕跡から着想を得て、漫画、小説、映像、インスタレーションなど様々な表現手法を用いた作品を発表する。主な展覧会に、「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」(国立新美術館、2019)、「りんご前線―Hirosaki Encounters」(弘前れんが倉庫美術館、2021-2022)など。近著に、絵本『わたしはしなないおんなのこ』(岩崎書店、2021)、小説『最後の挨拶 His Last Bow』(講談社、2021)、『トリニティ、トリニティ、トリニティ』(集英社、2019)など多数。



小田原 のどか (彫刻家 / 評論家 / 出版社代表)

宮城県生まれ。彫刻家/アーティストとしての活動と並行して、彫刻研究、版元経営、書籍編集、展覧会企画、評論執筆を行う。主な展覧会に「小田原のどか個展 近代を彫刻/超克する-雪国青森編」(国際芸術センター青森、2021-2022)、「あいちトリエンナーレ 2019」。代表を務める出版社より『原爆後の75年:長崎の記憶と記録をたどる』(長崎原爆の戦後史をのこす会編、書肆九十九、2021)を刊行。主な著書に、『近代を彫刻/超克する』(講談社、2021)などがある。



各展覧会評

■石原 海展 「重力の光」 2021 年 9 月 14 日 (火) - 10 月 10 日 (日)

現実の出来事を軸に、物語的な要素を加えた映像作品やヴィデオインスタレーションに取り組んできた石原は、今回、北九州の教会に集う人々と行った演劇とインタビューで構成された映像作品を、大展示室に設置した大スクリーンで上映した。キリスト教というテーマは西洋美術においては長い歴史があるが、現代日本における視点が持ち込まれていることは新鮮で、チャレンジングな作品である。また、宗教によって救われた人々が役を演じ、作品化されることで鑑賞者を救う側に転換していく構図は、一つの映像制作を通したワークショップ活動ともいえるだろう。

映像作品の演劇パートの舞台美術はよく作り込まれ、構成も緻密な上、演出や編集による工夫も見られ、完成度は極めて高い。社会の根底の矛盾に直面した当事者が語る言葉も、切実な実感を持って迫ってくる。大画面の緻密な映像に踊り場の抽象的な映像が対比されるなど、展示の仕方がよく練られており、作家としての優れた資質を感じさせる。

また、作り物であるにもかかわらず、素材を「パン」と明記している小展示室の作品からは、キリスト教におけるパンの意味と会場に置かれた作品の意図を考えさせられた。宗教やアートの根底のあり方を問う巧妙な仕掛けといえる。大展示室の観客席を照らす赤い照明は、映像で描かれる世界と鑑賞者のいる空間を有機的に結びつけようとする意図が感じられ、評価できるが、小展示室の作品はやや説明的であり、2つの空間の結びつけ方という面では工夫の余地が感じられた。

石原が、今後、宗教の持つ歴史や課題とどのような距離感で向き合い、これまでのスタイルであった個人史と結びつけて作品化していくのか、また、 美術分野に限定せず、映画監督としても実績を重ねていることからフィールドの越境性をどのように捉えて活動していくかという点においても、 これからが注目される作家である。

■菅 実花展 「仮想の嘘か | かそうのうそか」 2021 年 10 月 19 日 (火) - 11 月 14 日 (日)

自身の頭部を型取りして作った人形を使った作品でキャリアを築いてきた菅実花。今回、大展示室では人形と一緒に写した11点のセルフポートレート写真、実像と虚像を重ねた像を映し出す光学機器を用いた作品等を、小展示室では自身のスタジオを再現しながら、オリジナルとコピーの家具や、リアルとフェイクの植物等を用いたインスタレーションを発表した。

菅はこれまで人形を社会的なテーマで作品化してきたが、今回は西洋における自画像史の文脈で扱っているように感じられ、慣れたモチーフとの 距離感を変えようとする意思が感じられた。また、「見る/見られる」「撮る/撮られる」という関係が孕む問題や、「私と誰かが似ている」という 関係が、タイトルの回文と呼応するように、撮られた像が鏡写しに反転していくように配置されていたのも印象的である。

19 世紀以降の写真・光学機器の発展の歴史も踏まえられるなど、菅の研究熱心な姿勢がよく表れており、個々の作品も完成度は高かったが、作品数が多くコンセプトも多岐にわたっていたことで、展示としては焦点がばやけ、空間も散漫になってしまった。本物/偽物というコンセプトでいえば、小展示室の作品の方が成功していたが、ポートレートとはまた異なる意味合いのものであり、展示意図をより明快に伝えるには構成要素を整理する必要があっただろう。

しかし、菅が多様なアイディアと可能性を持つ作家であることは間違いなく、今回見られた変革への萌芽がどのように発展していくか楽しみである。 人形と作家の年齢がずれていく現象をどう作品化していくのか、西洋美術の文脈からの脱却を見せるのかなどについても、関心は尽きない。

■中島 伽耶子展 「Hedgehogs (はりねずみたち)」 2021 年 11 月 23 日 (火・祝) - 12 月 19 日 (日)

大小2つの展示室があり、踊り場からもフロアが見下ろせる資生堂ギャラリー。中島はこの2つの空間を巨大な壁で分断し、鑑賞者は暗い大展示室にしか立ち入れず、壁の"向こう側"である明るい小展示室は踊り場から見下ろすだけという、大胆な発想のインスタレーションを発表した。踊り場の呼び鈴を押すと、ベルの音がけたたましく鳴り響く。ドアの横に付いている照明は大展示室に人が通ると点灯する。暗い大展示室の壁には、開けることのできないドアがついている。壁に突き刺された棘のようなアクリル板のエッジは、明るい部屋から伝わる光で光っている。壁の向こう側は見えないが、音や光から人の存在は窺える。壁、棘、闇の中の光など、いずれのメタファーも明快であり、コミュニケーションに不安を抱える我々誰もが共感できるものである。暴力的な要素が目立つ一方、アクリルの棘が作り出す光と影の揺らぎは儚げで美しく、近づいたり離れたり、身体を動かしながら様々な見え方を楽しめる展示となっていた。

しかし壁紙の模様やランプの形態やベルの在り様、アクリル板の収め方などディテールの詰めの甘さが目立ち、特に明るい部屋では作者がどのような空間を想定しているのか明快さに欠け、説得力の弱さが惜しまれる。細部にまで細心の注意を払えば、さらに展示の強度が増しただろう。また、資生堂ギャラリーの構造上の問題かもしれないが、コンセプトに差別や分断といったテーマを含んでいるにもかかわらず、階段でしか降りられない踊り場を鑑賞のポイントとしたことは矛盾といえ、こういった点の処理は今後の課題である。

このように未消化な部分もあったものの、物質性を伴う「壁」という物体を空間に設置することで、視覚のみならず全身、全感覚を用いての鑑賞体験ができたこと、そして何より、資生堂ギャラリーの空間でなければ成立し得ない形で制作意図を明確に表現したことを評価し、第 15 回 shiseido art egg 賞は中島に決定した。

"The 15th shiseido art egg" award

Kayako Nakashima

The shiseido art egg award is presented to the exhibition that challenged Shiseido Gallery's space and created new values the most among the three exhibitions. It is selected by a jury of three people who are active in various fields related to creation.

General Comments

Serving as this year's shiseido art egg jury were Kenichi Kanazawa, Erika Kobayashi, and Nodoka Odawara. The Jury undertook their evaluations after viewing each offering during its showing at the shiseido art egg exhibition, and hearing an explanation from the artist.

This year's lineup consisted of Umi Ishihara, who explored the meaning of pain and life and matters of faith and salvation, via a video that interspersed theatre and interview; Mika Kan, who upset the viewer's visual perceptions primarily with a series of photographs taken of herself alongside a doll made from a cast of her own head, adding video and installation to the mix; and Kayako Nakashima, who installed a massive wall pierced with shards of acrylic, in a work where violence and beauty cohabited to show the problems of communication: three artists working in differing media and modes of expression, yet a common desire to interrogate with sincerity the involvement of art in wider social issues in these times of uncertainty and instability, and common ability to express these ideas in a sophisticated fashion.

Discussion on which of the three nominated artists most deserved the award veered back and forth in accordance with the main judging criteria, ie the integrity of the exhibit, and what the artist was attempting to express in the space of the Shiseido Gallery, and how.

In the end, the 15th shiseido art egg award went to Kayako Nakashima, for her highly original use of space in a manner only practical at the Shiseido Gallery, and her success in creating an exhibit with a physical quality using a work with a material quality.

Allow us to express our deepest gratitude to Kenichi Kanazawa, Erika Kobayashi, and Nodoka Odawara for spending so much of their valuable time judging the shiseido art egg award, a process that saw them engaging in exhaustive discussion, and offering new points of view befitting the times in which we live.

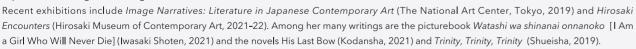
Kenichi Kanazawa (sculptor)

Born in Tokyo. Kenichi Kanazawa creates geometrically configured structural works using industrial materials such as metal, in parallel with works that connect the senses of sight, hearing and touch. These include "Fragments of Sound," which picks up sounds from irregularly fusion-cut steel plates, and "State of Vibratile Shape," using Chladni figures, a physical phenomenon generated from vibration. He participated in *Life/art: Hajime Imamura, Nobuyuki Tanaka, Kenichi Kanazawa, Masato Nakamura, Yoshihiro Suda*, a series of five exhibitions staged at the Shiseido Gallery starting in 2001.



Erika Kobayashi (writer/manga artist)

Born in Tokyo. Inspired by invisible things invisible, history, family and memories, and traces of places, Kobayashi presents works using modes of expression that range from manga and novels, to videos and installations.





Nodoka Odawara (sculptor/critic/publisher)

Born in Miyagi Prefecture. In parallel with her practice as an artist/sculptor, she also engages in sculpture-related research, publishing, editing, organizing exhibitions, and critical writing. Major exhibitions include Nodoka Odawara: Overcoming/Sculpting Modernity - Aomori Snow Country Edition (Aomori Contemporary Art Centre, 2021-22) and Aichi Triennale 2019. Recently released as publisher is 75 Years After the A-Bomb: Tracing the Memories and Documentation of Nagasaki (edited by the Association for Preserving the Postwar History of the Nagasaki Atomic Bombing, Shoshitsukumo, 2021), and as author, Overcoming/Sculpting Modernity (Kodansha, 2021).



■Umi Ishihara Exhibition Gravity and Radiance September 14 - October 10, 2021

Ishihara, who creates videos and video installations revolving around actual events, with the addition of narrative elements, presented on a large screen in the larger gallery a video consisting of a play put on with the congregation of a church in Kita-Kyushu, and interviews with these parishioners. Western art has a long tradition of Christian themes, but the incorporation of a modern Japanese perspective made this a fresh and challenging work. In addition, the schema in which individuals saved by religion played the parts in the play, the conversion of this into an artwork turning them, in turn, into saviors of the viewer, could be described as a form of workshopping via video production.

The stage sets in the theatre sections of the video were carefully crafted, and Ishihara's meticulous approach to the work's composition resulted in some ingenious touches courtesy of superb rendering and editing, resulting in an extremely cohesive and accomplished work. The words of the interviewees, all of whom had personal experience of the underlying contradictions of society, were compelling in their authenticity. Ishihara's approach to presenting the work, for example contrasting the finely-wrought images on the big screen with abstract images on the landing, was well-considered, and demonstrated her outstanding qualities as an artist.

Furthermore, despite being artificial, her work in the smaller gallery, its material specified as "bread," encouraged the viewer to contemplate the meaning of bread in the Christian church, and the intent of the work placed in the venue, in what could be described as a deft device for interrogating the fundamental natures of religion and art. In the red lighting illuminating the audience seating in the large gallery, it was possible to sense and appreciate the artist's intention of organically linking the world portrayed on screen and the space inhabited by the viewer, however the work in the smaller gallery was a little expository in nature, and it felt as if there was room for more ingenuity when it came to connecting the two spaces.

From now on, whether it be in the distance with which she engages with the history and issues of religion, and creates work by linking this engagement to the personal histories that have been her style to date; or how she interprets the transcendent nature of different fields due to her efforts outside the fine art arena as a film director, and translates that interpretation into her practice, Umi Ishihara will be an artist to watch.

■Mika Kan Exhibition Imaginary Lie October 19 - November 14, 2021

Mika Kan has built a career on works made using a doll cast from her own head, and in this exhibition, she presented in the large gallery eleven self-portraits shot with this doll, plus a work employing optical equipment to project overlapping real and virtual images; and in the smaller gallery, a recreation of her own studio that included an installation comprising original and replica furniture, real and fake plants and other objects.

To date Kan has used this doll in works with social themes, but this time her handling of the doll seemed to be more in the context of the history of Western self-portraiture, and one sensed she desired a change in distance from familiar motifs. Also striking was the positioning of these photographs in the gallery in inverted, mirror-image fashion, mirroring in turn the correspondence between the inherent problems of the "see / be seen" and "photograph / be photographed" relationships, or the "someone looks like me" relationship, and the palindrome of the Japanese title.

Kan's enthusiasm for research was very much evident, for example in her grounding of works in the development of photographic and optical devices from the 19th century onward, and the individual works exhibited a high degree of integrity. However the sheer number of works and range of concepts resulted in an exhibition short on focus, with diffuse spaces. In terms of the real/fake concept, the works in the smaller gallery were more successful, but these were different in meaning to the portraits, and to convey the intent of the show more lucidly would have required better ordering of its compositional elements.

Kan is undoubtedly an artist of many and varied ideas and possibilities, and it will be exciting to see how the seeds of transformation sown here develop. It will also be fascinating to observe how she addresses the widening age gap between herself and the doll, and whether she demonstrates any departure from a Western art context.

■ Kayako Nakashima Exhibition Hedgehogs November 23 - December 19, 2021

The Shiseido Gallery has two rooms for the display of art, a large and a smaller room, and the floor of the gallery is also visible from above on the landing. Dividing these two spaces with a huge wall, Nakashima presented an installation bold in concept, that confined viewers to the darkened larger gallery, access to the bright, smaller gallery "on the other side of the wall" restricted to viewing it from the landing.

Pressing the doorbell on the landing activated a loud bell. Lighting installed next to the door came on whenever someone passed through the larger gallery. On the wall in this dark gallery was a door unable to be opened. The edges of thorn-like shards of acrylic piercing the wall gleamed with light passing through from the brighter room. What lay beyond the wall was unseen, but the light and sound suggested a human presence. Wall, thorns, and light amid darkness are all obvious metaphors, and highly relatable to anyone ill at ease with communicating. While the element of violence may have been the standout feature here, the oscillation of light and shadow created by the acrylic thorns was fragile and beautiful, in an exhibit that could be viewed enjoyably in different ways from closer and further away, or by moving the body.

That said, there was a notable unfinished quality to details such as the pattern on the wallpaper, the form of the lamp, the bell arrangement, and how the acrylic pieces were fitted, and particularly in the brighter room, insufficient clarity around what kind of space the maker had envisaged, which left the work perhaps less convincing than it could have been. Greater attention to detail would have made for a stronger exhibit. And one could also say – though this may be more an issue with the construction of the Shiseido Gallery – that considering the inclusion of discrimination and division as concepts, a viewing point consisting of a landing one can only alight from via stairs could be termed a contradiction, one that the artist will have to sort out before any future exhibition.

Despite such unfinished aspects to *Hedgehogs*, however, Nakashima's ability to offer a viewing experience that employed not only the viewer's vision but their whole body and its senses, by installing in the space the material object of a "wall," and, most importantly of all, to express the intention of her praxis clearly in a form that could only be achieved in the Shiseido Gallery, and earned her the 15th shiseido art egg award.

第 15 回 shiseido art egg

主催:株式会社 資生堂

企画:資生堂 アート&ヘリテージマネジメント部

■応募受付: 2021 年 3 月 30 日 - 4 月 13 日

■ポートフォリオ審査

伊藤 俊治(美術史家 / 東京藝術大学名誉教授 / 資生堂ギャラリーアドバイザー) 光田 由里(美術評論家 / 多摩美術大学教授 / 資生堂ギャラリーアドバイザー) 資生堂ギャラリー学芸スタッフ・社員審査員(社員参画プログラム)

■展覧会

石原 海展「重力の光」2021年9月14日 - 10月10日

菅 実花展「仮想の嘘か|かそうのうそか」2021 年 10 月 19 日 - 11 月 14 日 中島 伽耶子展「Hedgehogs (ハリネズミたち)」2021年11月23日 - 12月19日 会場:資生堂ギャラリー

展覧会担当:板垣 美香、眞家 恵子、豊田 佳子

協力:And Greenworks 株式会社 PLANTS and LIVING、大鎌章弘様 / ガラス作家、 Curated by: Mika Itagaki, Keiko Maie, Keiko Toyoda 株式会社カシマ(菅実花展)

株式会社サンゲツ、三菱ケミカル株式会社(中島伽耶子展)

■第 15 回 shiseido art egg 賞審査

金沢 健一(彫刻家)

小林 エリカ(作家 / マンガ家)

小田原 のどか (彫刻家 / 評論家 / 出版社代表)

■カタログ

発行日: 2022年3月30日

発行:株式会社 資生堂

105-8310 東京都港区東新橋 1-6-2

発行人:住 佳織衣

編集: 板垣 美香 (テキスト p.6)、眞家 恵子 (テキスト p.12)、

豊田 佳子 (テキスト p.18)、井上 香苗 レポート:桜井 裕子 (テキスト pp.20-21)

デザイン:佐藤 園美

ロゴデザイン:丸橋 桂 翻訳:パメラ・ミキ

撮影:加藤 健

印刷・製本:株式会社東京印書館

©2022 資生堂 アート&ヘリテージマネジメント部

The 15th shiseido art egg

Organized by: Shiseido Company, Limited

Planned by: Shiseido Art & Heritage Management Department

■Application period: March 30 - April 13, 2021

Portfolio review

Toshiharu Ito (Art historian, Professor Emeritus of Tokyo University of the Arts, Shiseido Gallery adviser)

Yuri Mitsuda (Art critic, Professor of Tama Art University, Shiseido Gallery adviser) Shiseido Art & Heritage Management Department, Shiseido's employee judges (Employees participating program)

Umi Ishihara Exhibition Gravity and Radiance September 14 - October 10, 2021

Mika Kan Exhibition Imaginary Lie October 19 - November 14, 2021

Kayako Nakashima Exhibition Hedgehogs November 23 - December 19, 2021

Venue: Shiseido Gallery

Supported by: And Greenworks Co., Ltd. PLANTS and LIVING, AkihiroOkama/Glassworker,

Kashima Corporation (Mika Kan Exhibition)

Sangetsu Corporation, Mitsubishi Chemical Corporation (Kayako Nakashima Exhibition)

■"The 15th shiseido art egg award" review

Kenichi Kanazawa (sculptor)

Erika Kobayashi (writer/manga artist)

Nodoka Odawara (sculptor/critic/publisher)

■Catalogue

Published on March 30, 2022

Published by Shiseido Art & Heritage Management Department

1-6-2, Higashi-shimbashi, Minato-ku, Tokyo 105-8310, Japan

Publisher: Kaoruko Sumi

Edited by: Mika Itagaki (text p.6), Keiko Maie (text p.12),

Keiko Toyoda (text p.18) Kanae Inoue

Reported by: Yuko Sakurai (text pp.20-21)

Designed by: Sonomi Sato

Logotype designed by: Katsura Marubashi

Translated by:Pamela Miki

Photographed by: Ken Kato

Printed and bound by: TOKYO INSHOKAN PRINTING CO.,LTD.

©2022 Shiseido Art & Heritage Management Department